

校長室だより

# 共学共高

第  
17  
号

令和3年12月27日発行

発行責任者

白梅学園高等学校長

武内 彰

## 人との出会いが人生を変えていく

いつどこで誰と出会うかが、その人の人生の方向性を変えていく、ということは稀なことではない。長年教育の世界に身を置いていると、そのことを痛感させられる場面に出会うことがある。

私自身、紆余曲折はあったが、高校時代に2年間担任をしていただいたH先生との出会いがなければ、おそらく教育の道には進まなかつただろうと感じている。H先生は、「私についてきなさい。」というタイプの先生ではなかった。生徒たちが自主的・主体的に取り組もうとすることを温かく見守ってくださり、時には文集作成などのスポンサーにもなってくださった。3年生の文化祭ではクラス演劇に取り組み、力を合わせて一つの作品を創り上げる感動や素晴らしさを味わった私たちは、高校卒業後も30数年間、毎年H先生を囲んでクラス会を開いてきた。H先生は私が最後に都立高校校長を務めた日比谷高校で定年退職され、私が同校に校長として着任したときには、敷地内の百周年記念資料館で資料整理のボランティア活動をなさっていた。先生は「彰が日比谷の校長か。それは楽しみだ。」とおっしゃってくださった。2012年のことである。H先生が他界されてからクラス会は開かれていないが、同級生たちは還暦を迎え、新たなスタートを切った者もいる。私自身もその一人である。

白梅学園でお世話になって、早9か月が過ぎようとしている。ここでも新たな生徒たち、教職員との出会いがあり、1日1日を共に過ごしてきた。校長の方針として「生徒間の対話のある授業場面の創造」を打ち出してきたが、かなり早いスピードでさまざまな先生たちが取り組んでくれている。着任当初は、複数の3年生たちが校長室に来て、「私たちは2年間、黙って座っている授業に慣れているから、今更対話をしなさいと言われても…」という声も聞かされていた。ところが、さまざまな先生たちが少しずつ、対話の場面を設けて実践してくれるようになると、生徒たちもそれに応じて自分の頭で考え、考えたことを友達と交換するなどして、自分では気づかなかつた考えに触れ、対話の意義や楽しさを感じてくれるようになってきた。そういう感覚をもっていることを先生たちや生徒たち、あるいは保護者の方々、地域の方々から伺うことが増えてきた。「対話など取り入れたら、授業進度が確保できない。」「それだけで教材研究が大変になる。」という思いを持っていた先生たちも、実践

することによって、生徒の変化や手ごたえをつかんでくれることが出てきたようだ。ありがたいことである。集団での学びの場面において、その意義や楽しさを感じた生徒たちが、個での学びの場面、すなわち自ら取り組む学びにおいても、より主体的に進めてくれることを願わずにはられない。

12月25日、入試相談会など年内の広報・募集活動が終了した。夏の見学会や秋の説明会で出会った中学生とその保護者の方々から複数のお声掛けをいただいた。以前に校長室で面談をさせていただいた、バドミントン部に入部希望のKさんは、「単願で志望することにしました。」と報告してくれた。また、「いつも校長室だよりを楽しみに読んでいます。白梅の授業の様子が手に取るようにわかり、娘は早く対話のある授業に参加してみたいと言っています。」というEさんのお母様の言葉。「昨年度、日本中が臨時休校となった際に、全国の高校の中でも最速でオンライン授業を整えた日比谷の凄さは今でも語り草になっています。」とお話くださったSさんのお母様。

来年の4月からまた、新たな多くの新入生たちとの出会いがあることを楽しみにしている。期待をもって入学してくれた生徒たちをお預かりして、学力と人間性を高めていく、お互いに心を許し合える友人関係を築いて、高め合う集団へと育ててもらい、それが私たちの務めである。教職員たちの丁寧な広報・募集活動によって得られた新たな出会いを大切に、入学した生徒たちの人生がよりよいものへとになっていくように力を注いでいく。

皆様、いつもご愛読くださり、ありがとうございます。どうぞ良いお年をお迎えください。



(共学共高とは：本校のディプロマポリシー（育てたい生徒像）の一つで、「共に学び、共に高め合う」生徒の姿を表す)